政策マーケティング事業　福知山市第５次総合計画策定に向けた戦略プロジェクトチーム
第９回会議への参加についての報告

日時：12 月 2 日（火）午後 1 時 30 分～5 時 30 分
場所　市民交流プラザふくちやま　3－2 会議室
出張者：只友、中原、伊庭、大石
参加者：福知山市戦略プロジェクトチームメンバー

本出張報告書は、福知山市と協働事業政策マーケティング事業及び、初級地域公共政策士資格プログラムのアクティブ・ラーニング開発事業の一環として、福知山市第 5 次総合計画策定に向けた福知山市戦略プロジェクトチームの第 9 回会議へ参加した担当教員および学生の活動について報告するものである。

尚、学生 2 名はグループワークでファシリテーターを務めた。

１．第１回市民懇談会・第４回策定委員会の報告

まず、第 5 次総合計画策定を市民協働で進めるために立ち上げられた市民懇談会の第１回会議についての簡単な報告がなされた。内容は以下のとおりである。

委員を 3 グループに分け、100 人ミーティングの議論の振り返りを行った。特に新たな論点が出されたわけではなく、第 1 回目ということもあり、委員同士のアイスブレイクというところにとどまった。参加者は、無作為抽出で選ばれ 100 人ミーティングに参加した住民の中から希望者を募ったため、皆まちづくりの意識が高く、議論は活発に行われた。特に只友教員から講義を受けた熟議民主主義について、理解を深めようとしていたとのことであった。

次に､福知山市部長クラスの職員からなる第５次計画策定委員会の第４回会議について、戦略 PT リーダーから次の通り報告があった。

第 4 次総合計画のスローガンにも掲げられていた「北近畿をリードする」を入れるか入れないかで議論があり、策定委員からは、福知山市の地理的特性を表すものとして、入れたほうがよいのではないか。他市を見たときに一目でわかるようにしたほうがよい、との意見が出された。しかし、戦略 PT は、それまでの話し合いの中で、どの班とも「北近畿」を文言に入れない選択をしており、その理由について振り返ってみた。
量から質への転換、協働の意味（市民と一緒につくりあげる）を考えると、北近畿で一番になる必要はなく、市民が豊かさ、幸せを感じることができるものであるべきであると考えた。総計は誰のものか、と考えた場合に、そういう結論がでてきた。

２．講義―只友先生

「福知山の将来像を考えるために」

まず、将来像を考えるにあたり、現状をどう理解すべきか？という問いかけを行い、神野直彦と佐伯啓思の考える現状と将来への対応戦略についての説明があった。佐伯氏の見解は以下のとおりである。人口減少と高齢化、グローバル化が進むその中で、グローバル VS 反グローバル、成長主義 VS 脱成長主義、市場中心主義 VS 脱市場中心主義、効率第一 VS 安定性の図式がある。これからは、反グローバルでいくべきで、そのための社会像を示していないのが現状である。次に、神野氏の考え方について以下のとおり紹介された。今社会は、工業社会から知識基盤社会への転換期でありそのための対応が重要となっている。地域再生には①市場中心②市場主義に基づかない市民の共同の経済が考えられるが後者を選択すべきである。今は、地方には財政上の自己決定権がないが、地方創生などで政府からの資金分配が会った時のために準備しておく必要がある。

上記の考え方を踏まえて、福知山市が第 5 次総合計画に掲げようとするフレーズ「北近畿をリードする」の価値観は、高度成長期の概念、つまり、成長主義に基づいた概念であることが説明され、戦略プロジェクトチームメンバーの間では、これからの将来像を描くにふさわしい表現ではないということが理解された。

次に、総合計画策定に向けて、副市長の方針であった、「政策の量から質への転換」についての講義がなされた。まず、政策の質的向上について、①個別政策レベルでの質的向上②部局横断的な連携協力による政策の総合性を高めるといった質的向上が考えられるが、それらを市民協働で政策を創るということが、市民性の涵養につながるしくみであり、質的向上につながるのではないか、という説明がなされた。

次に、地域社会を創る方向性をどう考えるかについて話された。
佐伯と神野の方向性を具体的な政策としてどのように実現するかについてのヒントとなる事例として、「シビックアグリカルチャー」や「スモールマート革命」が紹介された。そして最後に、市を創るのは、市民であり、そのために職員はどのような役割を担うべきなのか、という思考の方向性をもつことが重要であるとの説明がなされた。

３．学生からの報告

福知山・守山プロジェクトの学生メンバーは、第 4 次総計の内容の問題点について検討してきた。その結果、問題点として以下のとおり指摘した。

①旧 3 町の不満・視点が盛り込まれていないのでは？

②市民協働が計画全体に反映されているか。「市民」の捉え方を明確化するべき
福知山市対市民の協働については盛り込まれているが、市民対市民、多主体の連携推進も必要、それが盛り込まれていない

③将来像を明確化するべきではないか
「北近畿をリードする」がぼんやりしている。どれが重要なのかがわからない。

④具体的政策とのリンケージがみられなかった。

そして、第 5 次総合計画には、市民側が見ても、市がどちらを向いているかわかるような

ものにすれば、市民としてどのように動けばよいか理解してもらえるのではないか、という意見がだされた。

４．グループワーク

テーマは、「福知山らしさから将来像へ」とし、「北近畿をリードする」に変わるキャッチコピーを考える方向で話合われた。

班は 2 つに別れ、それぞれのグループに学生がファシリテーターとして加わり、話愛が勧められた。

第 1 グループでは、キャッチコピーは、他市へアピールするようなものになっているので、そうではなく、市民が望むものにするべきであるとの意見がだされが、そこそこ満足している市民も多く、今後将来的にどうしていったらいいのかという議論になった。
第 2 グルーでは、話し合いがあふれているまち、100 人ミーティングのようなものが日常化されれば活気がうまれるのではないかという意見で一致し、ベンチを置いてお茶できるところや、街中により多くの立ち飲み屋を設置するといった提案がなされた。

５．只友先生コメント

グループワークの発表の後、只友先生から、「らしさ」にこだわり過ぎているのではないかという指摘があり、「そこそこ」からもう一つレベルアップするものにするには、という問いかけがなされた。ワンランク上のまちをどう作るか、である。そして、次のようにコメントされた。

今までは、インフラ整備でワンランク上を実現してきたが、今後は脱成長主義でワンランク上を目指す必要があるが、すでに、神野がやっていないことをしている。100 人ミーティングや事業買取で、住民が政策を創ってきている。これが、先進事例となるが、福知山市の将来像を形作っていくためには、住民の力量を上げていく必要がある。市として目標を掲げていくかどうかだ。

６．今後のスケジュール

最後に、只友先生より、12 月 19 日の市民懇談会での発表に向けて、検討すべきテーマとして、「今後、北近畿をどうとらえるか」「ワンランク上のまちとはどういうものか？」が提示された。12 月 19 日は、市民懇談会、戦略 PT と学生メンバーがそれぞれに検討した結果を発表し合い、お互いの考えを共有した上で第 5 次計画の具体的内容について検討する予定である。

以上